

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

黒牢姫Ⅱ

倉田シンジ

表紙イラスト:あかめ

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『黒牢姫Ⅱ』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



黒牢姫II

倉田シンジ
表紙／あかめ

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

アメリア枢機姫

宗教面で絶大な権力を誇るルガ教皇国の皇女にして枢機卿。数年と一緒に暮らしたジゼル王女を姉のように慕う大人しい少女。

ジゼル王女

アクィタニア王族唯一の生き残り。女王即位を間近に控えている。

ワイト公

王国から独立してワイト公国を打ち建てた野心家の公爵。

アクイタニア王国や、そこから独立したワイト公国を含めて大小さまざまな国がひしめく大陸に、ただ一国、異彩を放つ小国家が存在する。

宗教国家、ルガ教皇国。

その権威は絶大にして不可侵。大陸でもっとも長い歴史を持つその国は、宗教を背景として各国間の紛争仲裁や王権の認定を行ってきた。

世襲の教皇を頂点とするその国家は、領土こそ小さいものの影響力で言えば大陸一。大陸各国家に外交のパイプを持ち、さまざまな紛争に介入してはそのたびに権力の強化を図ってきた国家であった。

そんなルガ教皇国に新たなアクイタニア王即位の連絡が入ってきたのは、アクイタニア王国とワイト公国との間に協定が結ばれて一年が経った頃だった。

※

アクイタニア王国とワイト公国とは長年争ってきたが、これからの友好のために即位式はワイト公国内で行いたい——そう連絡を受けた教皇国は、ジゼルに王権を与えるための使節団を公国へと派遣することになった。

現在、ワイト公国首都にある城館では、教皇使節団と新女王との謁見が行われている。玉座から立ち上がったジゼルの一歩後ろには、まるで後見人のような形でワイト公が佇んでいる。そしてその前方には、薄い白のローブを羽織った使節団が佇んでいた。

たおやかな所作で歩むジゼルは、一年の時を経てますます艶やかさを増している。

凛々しさを湛える瞳がわずかに伏せられ、一步ごとに長い白銀の髪がゆらめく。胸元の開いた黒いドレスからは豊かに実った乳房の膨らみが谷間を見せつけ、より女らしさを増した肢体の充実ぶりが垣間見えていた。

「使節団の皆様、遠路のお越し、誠に痛み入ります」

新女王ジゼルの言葉に、一礼した使節団の長が一步進み出る。

「このたびは……女王即位……おめでとうございます……」

権威に満ちた使節団の長というにはまるで似つかわしくない、今にも消え入りそうな声だった。挨拶に続いて儀礼的な応答がぼつりぼつりと述べられるが、それらも同じく音量が小さく、つかえつかえのものだ。

使節団の長であり、教皇国内で枢機卿の役割にあるその人物の顔に、ジゼルはわずかな驚きと戸惑いを覚えていた。

教皇使節団の長——それは、一人の少女だった。

「ジゼル様……おひさし……ぶり……」

「ええ、本当に……。久しぶりですね」

儀礼的な挨拶の最後に交わされた言葉に、ジゼルとその少女との関係がわずかにだが現れている。

7

アクイタニア女王誕生のため、教皇国から派遣された枢機卿の名はアメリカ。教皇の娘であり、まだ十代半ばの可愛らしい少女だった。

人形のように滑らかな肌にすつと通った鼻すじ、柔らかそうな小さな唇に少し目尻の下がった優しい目つき。ジゼルの記憶の中にある少女そのままだ。

「こんなに大きくなったのね……」

懐かしさに笑みを浮かべたジゼルが言うと、

「お姉様も……ご立派に……なられました……」

目元をほんのわずか、嬉しそうに緩ませたアメリカが小さな声で返す。

表情も言葉も変化が小さく、初対面の者が見れば不機嫌なのかと勘違いしてしまうかもしれない。だがジゼルは、アメリカのそれは普通であり、むしろ今は表情豊かなのだということを知っていた。

ジゼルの親であるアクイタニア王暗殺事件が起こった頃、ジゼルは教皇国へと預けられていた一時期があった。二人は、その頃の数年を共に過ごした顔なじみだ。

宗教衣を着た少女が表情を動かさず無口なせいもあるのだろうか、まだ十代だというのに、少女枢機卿は神秘的な雰囲気をもとわせている。

「……………」

無言のまま自分を見上げてくる少女を懐かしい思いで見つめるジゼル。過度なほどに大

人しく引つ込み思案なアメリカが枢機卿となり、使節団の一員として働いていることなど想像だにしていなかった。

「ほう、お二人がお知り合いだったとは。これは奇縁ですな」

「……っ」

突然のワイト公の声に、ジゼルの肩がびくりと震える。懐かしい思い出の数々から目を覚まさせ、何かを思い出させる声だった。

「では皆様、どうかごゆるりと長旅の疲れをお癒やしください」

不安、戸惑い、恐怖……そんな感情が入り混じった複雑な表情を見られまいとジゼルは踵を返す。そのわずかな変化を、アメリカは感じ取ることはできなかった。

「……………?」

アメリカが口を開くより早く、お互いの挨拶が終わったのを見計らったワイト公国の大臣が口を開いていた。

「では、使節団の方々はこちらへ。皆様方には専用の館を用意いたしました。即位式の準備が整うまでの間、隣町にてご滞在ください」

「……え？」

その言葉に、無表情の顔がゆつくりと大臣を向く。

「おや、なにか問題でもございましたか？」

大臣が尋ねると、アメリカは考え込むような仕草で数秒ためらったあと、やっと口を開いた。

「ここに……滞在するのではないのですか……？」

「申し訳ございません。この城館には兵も詰めておりますし、あまり歓待向けの施設は揃っていないのです。即位式まで、皆様方には隣町に滞在していただければ幸いです」

「……………」

幼馴染みと昔話に花を咲かせるつもりだったアメリカにとってそれは予想外だった。

「……………あの」

声をかけようとして顔を向け、いつの間にかジゼルが退室していることに気づく。

アメリカが待ち望んでいた数年ぶりの再会は、あっけなく終わりを告げていた。

※

教皇の娘という立場は、他国で言えば王女という地位に等しい。

実際の生活ぶりもそうだ。

宗教色の強い国柄とはいえ、住む場所は立派な城だし寝食も贅沢なもの。権力の強さといい財力といい、むしろ他の王族よりも贅沢と言つていいほどの暮らしぶりだった。

宗教の長としては質素を目指すべきはずだが、現実はそうではない。

教皇の三番目の子であるアメリカは、特別信仰心が強かった。ゆえに彼女は、矛盾した

環境で育ったともいえる。しかも教皇の血を引く以上、将来は政治に参画し、特別な立場をもつて各国との折衝に当たるべきだった。幼い頃から求められている仕事だ。

宗教学から政治学に至るまで、アメリカたち教皇の子らは男女の隔てなく厳しく育てられてきた。なのに、生来大人しい性格で引つ込み思案な彼女にとって、強大すぎる権力も、将来背負うことになる責任も、気が重いものでしかない。逃げられるものなら逃げたいが、裕福な暮らしを捨てて逃げられるほどの勇氣もない。

幼年は、子供ながらにそんな重圧を感じる毎日だった。

そんなとき、アメリカはジゼルに出会う。

「アメリカ様、お初にお目にかかります。アクイタニア王女、ジゼルと申します」

「……うん」

初対面の相手に戸惑うアメリカにとって、毅然としたジゼルは眩しく映った。

歳も近く、周囲から姫と呼びうやまわれる地位も似たようなもの。ただ、教皇の娘として絶対権力の内で育てられてきたアメリカにとって、親を暗殺されるという悲劇は想像すら難しい不幸な出来事だった。

なのに、教皇国に保護されてきたというこの王女は、自分の不幸を嘆くでもなく、こんなにも立派でいる。自分と数歳しか違わないのに、まるで大人のように凛々しかった。

この王女は自分の肩に王室の再興がかかっているという重責をすでに認識しているのだ

と、アメリカにもすぐに理解できた。責任から逃げたがっている自分とは違うのだと。

(こんなふうにならいたい……)

おさなごころにそう思ったのを、アメリカは強く覚えている。

歳の近い二人は自然と一緒にいることも多くなり、やがて大人しいアメリカも次第にジゼルの快活さにうち解け、仲良くなつていった。

密かな憧れからくる好奇心だろうか。引つ込み思案のアメリカにしては珍しく、ジゼルにあちこちついて回ったのを覚えている。もつとも、無口なのは相変わらずだったが。

ジゼルはジゼルで、いくら毅然としているとはいっても内心は寂しかったのだろう。無口ながらに妙に懐いてくる年下のお姫様を邪険にすることはなかった。

ジゼルが国に戻る頃には、お互いを本物の姉妹のように感じるようになっていた。

「そのままで……構いません」

荷物を開いて整理しようとするメイドにそれだけを言つて、アメリカは視線で部屋を出ていくように促した。

「しかしお召し替えをなさいませんと……。お手伝いいたします」

「……構いません」

にべもなく言われて、数人いたメイドたちがすぐごと部屋を出ていく。

く、あまりに意味を持たなかった。

「神？ ならばその神へ祈りを紡ぐ唇から犯してさしあげよう」

「ううっ！」

ほっそりした肩を押され、ひざまずかされる。

身体を隠すように胸を覆い、おそろおそろ顔を上げたアメリカの目の前に突き出されていたのは……、

「ひっ……あ……あ」

恐怖に目を見開く少女のこわばった顔の前に、初めて見る男性器が映った。

まだ勃起はしておらず、血管の浮かんだ胴体と傘をだらりと垂らしている。

それは彼女の知識のどこを漁っても見当たらない形状だった。そもそも、性に関する知識量が圧倒的に不足している。

男性器と女性器で人間はまぐわい、子種を受けて女は子を産む。それを快樂のために行うことは蔑むべきこと。信仰にも関わる、そういった知識は学んだ。

だが、実際に行われる行為の内容は知らない。

そういったことは姫と呼ばれるような立場のアメリカには不必要で、嫁ぐ際に侍女から初夜のたしなみとして教えてもらおうものだからだ。

その男性器は、あまりに想像外のもの。ましてやそれを顔になすりつけられては……。



どうしていいのか混乱したままのアメリカの頭が押さえられる。同時に、顔面へ初めて嗅ぐ奇妙な匂いが塗りつけられ始めた。

「ひうつ……ぶ、やめ……て……」

頬から鼻梁へ、そして唇へ。まだ柔らかかった肉が、次第に硬さを増していく。

（う、なに……これ……）

身体の一部が変化していくおぞましさを顔面に感じて顔を背ける。が、すぐに半勃起の肉棒は追いつがってきて唇をへこませてくる。

嫌悪感を掻き立たせる行動の意図はすぐに明らかとなった。

「舐めろ」

「……え」

啞然として男を見上げる。そのすきに、唇が割り開かれた。

「んぶ……うう……ふうううう」

性器を口に含むなど彼女にとつて信じられない行為だった。それだけに対応が遅れ、すでに口の中は塩気のある味でいっぱいだ。

「これはフェラチオといって、娼婦や淫売が好んで行う淫らな行為ですぞ。アメリカ姫、どうですか？　ぜひ感想を聞きたいですな」

「んぶぶっ！　ふ……くむうう！」

感想どころか、頭を押さえられて塞がれた口などきけるわけがない。

口の中から鼻まで、生臭いような匂いで充満している。思うように呼吸ができず、かといって口を動かすことはためらわれる。喋ろうとするだけで舌の上に乗った気持ちの悪い物体を意識してしまう。

「この程度で音を上げてはいられないでしょうに」

ワイト公の言葉と同時にペニスが半分ほどずりりと抜け出て、さらに直進。唾液と音を立てて跳ね、すらりとした印象の頬が膨らんで。それを連続する。

ぶちゅ！ ず……ぶぶつ！

「んんんーっ！ ふうっ、は、ひふうううっ！」

涙目になった瞳で挿入行為の中止を訴えるも、完全に無視。

「もっと舌を動かしてもらいたいですな。これはこれで気持ちいいが、物足りなくもある」

(意地でも……そんな真似など……いや……)

アメリカは涙ににじむ視界でふるふる首を振った。

「舐めろと言っている。逆らえらでも思っているのか？」

言葉が険しくなった。怒りを向けられ、胸を騒がせる恐れを必死でこらえた。

(い……や……)

ずるり。陰茎が抜き出されていく。唾液が糸を引き、ぼたりと落ちた。

「こほ……！ はう、うああ……」

汚れた唾液をだらだらと唇に垂らし、少女が咳き込む。

「牝犬、もう言わないぞ。その舌で、これを舐めろ」

「……っ！ はあ……はあ……」

蔑む言葉で命令され、怒りにカッと血が沸騰する。なのに呼吸は乱れたままだ。

自分は怒っているのに、もうこんな屈辱は受けたくないのに、それ以上行動できない。神への祈りも、相手を呪う言葉すらも口にできない。

恐怖心はもちろんある。逆らって事を公にすれば困るのはジゼル——それもある。

しかし元々大人しく気の弱いアメリカだ。圧倒的な立場から自分を見下ろすこの男は、自分を逆らえさせない空気を持っていた。

「……は、あ……は……」

ペニスを突き出したまま沈黙したワイト公と、緊張に息を乱すアメリカ。その呼吸だけが二人きりの部屋に響く。それが何分続いただろうか。

（もう、だめ……ジゼル姉様……。神よ……赦したまえ……）

最後に心の中で救いを求めて、少女は震える舌を差し出していた。

ぴちゃ……。

猫のように舌を伸ばし、おそろるおそろる触れた亀頭。それは体温以上に熱く感じられた。

(これが男性器……ペニス……)

さつきはよく見る間もなかった。今はすぐ眼前にあり、自ら顔を近づけている。

唾液に流されたのか嫌な匂いはさつきほど感じず、その姿を刻々と変化させていた。舌先に脈動が感じられるたびに、それを押しのけるように大きさを増している。さつきまでの半勃起状態でも大きく魁偉に感じられたものが、さらに膨らんでいた。

「そうだ。舌でまんべんなく舐めてから……びったりくわえ込んで舌を動かせ」

それは主人が下僕に下す命令そのものだった。従うことが当たり前、逆らうことなど許さないという意志の込められた言葉だ。

「……………」

どうしてこんな穢れに満ちたことをしなければならぬのか納得できない。それなのに、無口で大人しい少女に戻ってしまったアメリカは命令通りに舌を動かした。

一つだけ違うのは彼女の表情だ。ほとんど無表情、見慣れた者にしか分からないほどの変化しか見せなかったその表情が、今は恥ずかしさを浮かべている。男根に怯えるように目を細め、眉尻を下げて視線は弱々しく。頬を羞恥に染めて。

ぶちゅ……にち……。

舌に絡みついてくる先走りの粘液に戸惑いながら、舌で亀頭を舐め上げる。馬鹿正直なほど丁寧な、根元の付近からカリの裏側までを舌尖でなぞりほじっていく。

そしてそれが終わると、唇を開いた。

「んむ……う……ふ……あ」

そっと包み込むように、自信のない及び腰な動きで。

ずる……る……。

命じられたように口を閉じると、自然と吸い上げの動作が入った。緩やかながらもうい
ういしい吸引に、ペニスがとくとくと血を増して快感を訴える。

ぴちゃ……ちゅ、にちっ……ぶぶっ。

ワイト公の命令は次々に飛んできた。中の舌を動かさせ、肉茎を閉じた唇で揉み込め、裏
スジを舐めろ、顔を動かして出し入れさせろ……。

それを従順にこなしていくアメリカ枢機卿。大公はすがめた視線でそれを見下ろす。
ずち！　ぶぶっ、ぷちゅ……ちゅばっ！

いつの間に行方はエスカレートし、卑猥な音も大きさを格段に増していた。

「初めてにしてはなかなかだな。従順で実に好ましいことだ」

「んっ……う……ふう」

屈辱だった。伏せたまぶたが睫毛を震わせ、乳房を隠す腕が拳を作る。

「最近ごぶさただな。我慢せずにそろそろイクか」

「んぶ……？　ふっ、ん！　んんんっ！」

そのワイト公の独り言を聞いて一秒と経たないうちに、ペニスは跳ね躍っていた。どくっ！ どくどくっ！ びゅるるるっ！

「んふううっ!？」

咄嗟に顔を引こうとして間に合わない。半分は口の中へ、もう半分は宙を舞って少女の顔面に降り注ぐ。今までと比べものにならないむわっとした臭気が鼻腔を犯した。

「ひあ！ ……あ……うう」

反射的に顔を拭い、そのヌルリとした液体が引き伸ばされる気味の悪さに動きが止まる。「男の精を見たのは初めてだろうな。どうだ？ 汚らわしいか？」

嬉しそうに笑う男を、白い線を這わせた顔で呆然と見つめる。そして数秒、やっとそれが精液であることを理解し、そんなものを口と顔面にぶちまけられた事実を思い知った。

「……こん……な……こと……、うそ……」

怒りよりも嫌悪よりも、惨めさがアメリカを打ちのめす。頭が殴られたようにぐわんぐわんと目の前が揺れていた。

「いやあ……もう、やだ……」

涙声になって呟く少女。枢機卿でも姫でもなく、ただの少女として震える。

「この程度で音を上げてはだめだと、言っただけだか？」

ワイト公の冷酷な声に背筋が震えた。次なる行為に想像が及び、ヒッと息を呑む。

肩に置かれた手をビクリと跳ねて振り払い、アメリカは床を這うように後ずさった。

「……ゆるさ、ない……ぜったいに……」

ヒステリーを起こしそうな言葉だった。普段ではあり得ない感情を露わにした表情。ワイト公を睨み、穢れを降りかけられた自分の身体を抱きすくめる。

対峙——というより、その姿を見下ろしたワイト公はしかし、落ち着いていた。

「これは困った。そんなに恨まれるとは……無理に犯そうものなら自害でもしてしまいうだ。かといって姫を亡き者にすれば教皇国との関係がこじれてしまうしな……」

どこか芝居じみた口調だった。最初からこの程度の脅しで従順に従うなどと考えていなかったことは、その口ぶりから明らかだ。

「ではこうしよう。お前と私で賭けをするのだ。いいな？」

「……か……け」

憤怒の顔に戸惑いが浮かぶ。すべてワイト公の狙い通りだった。

アメリカは元々気が弱いうえに、命令されることに慣れていない。だから、少し圧迫感を与えてやればすぐに意志を揺るがしてしまう。

彼女に強く命令できるのは親である教皇と……もう一人。彼女が強く信仰する、姿を見たこともない「神」のみ。

ならばその神を己の中に見させてやればいいとワイト公は考えた。そのために彼女をも

「ちっ、ちが……うはっ、んんっ、やあ……っ」

アメリカの腕が取られ、強引に引き寄せられる。緩やかな膨らみの胸へ当てられた手の平が、宗教衣の上から無造作に乳肉をこねくり回した。

少女は数人の男たちに囲まれていた。その数は……すくなくとも十人はくだらない。この数日で、夜な夜な裸で現れる少女の噂は町に広がっていた。

若い娼婦崩れが嫌がらせて毎日根城を追い出されているらしい。さる金持ちの使用人が主人の命令で罰を受けさせられているらしい。貴族の娘が一夜の遊び相手を求めているらしい……。そんな噂が好色な者の間でまことしやかに囁かれていた。

その噂に唯一共通するのは、その少女がとびきりの上玉だということ。

「どれ、今夜もかわいがってやるよ。数が多いから何回出来るかわかんねえけどな」
そんなことを言つて、下層民の男がアメリカの唇に吸いつく。

「んあ……む……！」

くちゅくちゅと音を鳴らして舌が口腔へと潜り込んでくる。逃れようとした舌があつという間に搦め捕られ、つうつとなぞられた。

(もお……いや……)

苦しげに舌を動かしながら、アメリカは周囲を見た。

噂を聞いた男たちは、日に日に数を増して夜の町で彼女を待ち構えている。この街の道

に詳しくない彼女が、それらの男の視線をかくぐって城壁門まで辿り着くことは不可能に近かった。

少女は毎日のようにこの都市からの脱出を邪魔され、捕まえられて……。

「ひゃ！ んひゅ……んぶっ！ くふう」

口を吸われて身動きの取れない間に、他の男が宗教衣の裾を持ち上げていた。

「ほらやっぱりだ。お前は好き者だからなあ、穿いてないと思っただよ」

裾の中にあるのは少女の素足のみ。当然股間を覆うべき下着は存在しない。ワイト公それは許さなかったからだ、アメリカにはそれを説明する勇氣はない。

「んぶ……っふぁ……あぁ、やめひゃ……んふうっ！」

すると捲り上げられた裾からなめらかな足が覗くと、男たちはさっそく手を伸ばし始める。ふくらはぎから内腿へ、そして秘苑の近くまで。男たちの手が這いずり、少女の身体を悶えさせる。

「っん、ふぁ……あぁう……」

必死の抵抗も男たちにすれば弱々しい抵抗に過ぎない。

「とかいって喜んでるんだろ？ 昨日だってあんなにイキまくってたじゃねえかよ」

「んんーっ！」

否定の出来ない言葉を聞かされながら、アメリカの宗教衣はでたらめに脱がされ始める。

ゆったりとした腰を引き締めるための腰紐はほどかれ、背にある留め紐もしゆるりと音を鳴らす。胸を揉んでいた男は広がった肩口から手を突っ込んで直に乳房を揉み始め、唇を吸う男は彼女に膝を屈することを強要した。

「つぶ、はあ……あ……」

やつと口を解放されて、その代わりにひざまずいた少女に、男たちはどんどん群がってくる。異様な光景だがこれが毎夜の恒例と化していた。

ぷりつとした乳房がはだけられて、執拗に摘まれている。乳肉は肉を集めたり引つ張られたり、むにむにと形を変えてすぐにある反応を起こし始める。

「ほらほら、もう乳首が立つてるぜ。ちいせえ胸のくせに、ここを弄られるのが好きなんだよな？」

男たちの指が先を争うように小さな乳房へ。

「ふあああっ！」

乳房の大きさのわりに目立つ蕾がにゅつと突き立っている。それが、ピンと指先に弾かれたり、ぐつと押さえ込まれたり。こりこりとすり潰されて、ピリピリした感覚がすぐに変化し始める。

（ま、また……いやあ……）

敏感な乳首はすっかり刺激に慣れ親しみ、弄られるだけの感覚をすぐさま変換し、

甘い快樂へと変化させてしまうようになっていた。

(「だけど……どうしても抗えない……」)

「はあ……あんなっ！ 引つ張らないで……取れちゃう……う」

ほんの数日前までの寡黙な少女が嘘のように、アメリカの口からは様々な言葉が流れ出して来る。もちろん意識してのことではない。ただ単に、溜め込んでおくことで感情を爆発させてしまう言葉を、溢れ出す前に少しでも減らしておこうという無意識の変化だ。

そう言った意味で、ここ数日の体験は調教に似ているかも知れない。アメリカ本人は嫌がっていても、本能がそれを受け入れてしまう。健在なうちに理性がいくら警鐘を鳴らしても、やがて精神がすり減るように思考が混乱し、抗えなくなる。

「お前はマゾの気があるからな。少し乱暴なくらいでちょうどいいんだよ」

「きひっ！ あ、乳首……っ、いた、ひゃあんなっ！」

にゅっと潰された充血蓄が根元から先端へ、搾乳のように圧迫を変化させつつこねくり回されて……乳房の中にじくりと甘い蜜が発生する。

「だめ……また、おかしくっ……なっっちゃ……」

自分の変化を感じて恐怖するアメリカ。それに嘘はない。

だが、先ほどの男の言葉は的確に彼女の心の中を表していた。

つまり、虐げられることに喜びを感じてしまうマゾの気質だ。見も知らぬ男たちにされ

るがまま、本来なら触れることすら許されない高貴な肌を穢されて。絶対的な服従を強いられる悦びは、神へ捧げる無報酬の服従に繋がるものがある。

「ほら、舐めるよ。こないだ教えたようにやるんだぞ」

男に命令されて背筋が震える。このままでは流されてしまう、ダメだと感じるほどに感じる、その焦燥感がたまらない。

これ以上進んではならないという理性と欲望への渴望がせめぎ合うこと数秒。

自ら快楽を求める積極的なものではなくあくまで消極的ではあったものの、彼女は従順な奉仕を選んだ。

「は、はい……」

上目遣いで頷いて、舌を伸ばして亀頭に当てて。眼前にペニスを誘導すると、仮性包莖の皮を舌先だけで器用に剥いていく。

「んぶ……ふ。くは……む」

やがてつるりと剥け上がった亀頭に、小さな唇で吸いついて。

ちゅば……ちゅる、にち……。

ちろちろと舌を躍らせながら、乗せた唾液で濡らしていく。

「おお、上手くなったぜ。お前はスジがいいな」

（褒められ……た……）

こんな男に淫猥なことで褒められてゐるのに、まるで教皇である父に褒められたときのような至福を覚えてしまう。周囲の期待に負けないようにと努力してきた彼女にとって父に褒められることが喜びだったのは確かだが、こんなに簡単なことで同じ喜びが得られるとは……そんな感動で胸が満ちる。彼女の中で信仰と快楽の比重が日に日に変わっていったのは無意識の出来事だったろうが、それは行動へと如実に表れている。

「んふう……はふ……ひゅ……んんっ」

鼻息も荒く奉仕するアメリカ。その身体が後ろから抱きかかえられ、尻を持ち上げられる。要するに四つん這いだ。

犬のように舌を伸ばす少女の尻は丸見え。裾は完全に捲り上げられている。

男の指が秘裂に触れると、アメリカは怯えたように肩を震わせながらも逃げようとはしなかった。

にち、つとくつろげられた陰唇に、唇が吸いついた。

「んんっ！　ぷはぁ……ん、んんっ！」

一瞬だけペニスを吐き出して喘ぎ、再び舌を動かし始める。その尻は心なしか、さつきよりも高く掲げられていた。

愛液はすでに分泌され、膣口から小陰唇にいたるまでがヌルヌル。男は小陰唇を噛むようにして唇に挟むと、むにむにと咀嚼動作で揉みこねる。

「ん……んふっ……ひやめ……くすぐった……はふ」

くすぐったさを訴えるアメリカの表情には、辛そうな影が差している。それはむしろ、心地よくも弱い刺激にじわじわと苛まれて忍耐する姿に近い。

それが証拠に、陰唇のヒダはすぐに充血してぷくらした柔らかさを持ち始めた。わずかに花卉を開いたように……、清楚な印象の秘裂に淫靡な花を咲かせ始める。

「見ろよ。おま○こがだんだんいやらしくなってきた」
男の言葉を聞いてぞくん！ 身体が震える。

「やめて……言わないでください……っ。わたくしのソコ……もう、見ないでえ」
反射的な言葉だったが、それすら男たちの耳を樂しませる音色のひとつ。

「いいねえ、その言葉遣い。なんていうか、ジゼル姫みたいな高貴な感じがするんだよ」
「ハハッ……、お前はジゼル姫の信奉者だからな」

ドキリとした。偶然とはいえジゼルの名前を出されて、冷水を浴びせられた頭が冷え冷えと理性を蘇らせていく。同時に、あえて頭の隅に追いやっていたすさまじい罪悪感が襲いかかってきた。

（あ、ああ……。や、やはり……だめ）

ぞくりぞくりと背筋を走る痺れに腰を悶えさせながらも、少女はペニスを舐める舌を止めた。瞳に涙が浮かび、この状況の異常性が意識の中で際立ち始める。惨めさや悔しさが

溢れて、快楽の暴走に強烈な制動を付けてきた。

「わ、わたくしは……」

思わず口を突いて出てくる言葉を押し止められない。

「わたくしはルガ教皇国の枢機卿、アメリカ……です。その手を離して……っ」
言葉の最後は痙癢を起こしたように語気が荒かった。

その一瞬、男たちの動きが止まる。

そして長い数十秒が過ぎて……大変なことを口走ってしまったとアメリカが顔面を蒼白にし始めた頃。

「……は……ははははははっ！」

周囲は笑いに包まれていた。

「なんだ？ 今日はそのいう趣向だったのか？」

誰も、その言葉を信じる者はいなかった。

「枢機卿様がこんなところで犯されて喘いでるってか？ そりゃ失礼つてもんだろ」
アメリカの目の前が暗くなる。男たちの声は、もう聞こえていなかった。

（わたくしは……もう……っ。うう、くふ……うううっ……）

溢れそうな涙を必死にこらえても嗚咽は止まらない。凄惨なほどに心を掻き乱され、惨めさに心が潰されて……。

「では枢機卿様をいつものように犯して差し上げましょう。俺のチンポで存分に喘いでく
ださって結構ですよ……っ！」

ずぶずぶっ、と入り込んでくるペニスを、少女のヴァギナはねつとりした粘膜を絡ませ
て受け入れる。

「あはあ……ああ、あああ……んっ」

こころにぽっかりと開いてしまった穴を埋めるような快楽の刺激。あまりにも無防備に
なっていた心に、心地よさがじんわりと染み渡る。

「ほら枢機卿様、もつと尻を上げて振ってみせろよ！ 気持ちいいだろ？ ああ？」

「う、ああ……ああ……」

数日前はきつすぎたほどの膣道は、柔軟に蠢きながらペニスを舐めしゃぶる。がっしり
と腰を掴まれての乱暴な挿入。ぐちゅつと水が弾ける音がして、膣の奥深く、子宮の壁が
ぐにゅと擦れる感覚が迸った。

「んくううううう！」

涙を流す少女枢機卿を見ても、それが屈辱の涙だとは誰も思わない。実際、子宮の壁を
撫でられたアメリカはビリビリした——しかし甘くて心地よい痺れを全身に感じ、唇を開
いてわなわなと痙攣させていた。

(いい……よ……ね、もう……。ジゼル姉様……いつしよなら……)

すべては無意識に。アメリカは諦めで心を満たし、すべてを放棄した。

「……さつきから口が止まってるじゃねえか。さつさと舐めろよ」

「……はい」

アメリカの口が亀頭に吸いつくと同時、抽送も再開される。

「はあ……ああう」

下腹を掻き回す感触に震えた声が溢れ出す。

「お？ どうしたんだ？ 妙に絡みついてくる……っ」

ペニスを包んでいた肉の壁がいつせいに蠢く。それがざらついた感触を生んで、呑み込んだ亀頭をぶちぶちと刺激した。男は締めつけに誘われて、よりいっそう腰を突き出す。

「んふううっ！ いいっ、ソコおお……」

甘い美声に快楽の余韻を残して、アメリカは眉尻を下げた。

「よし、ならもつとだ！ 今日徹底的にやりまくってやるからな！」

「うんっ、もつとお……っ！ おくっ、一番奥が……いいっ」

自ら腰を振り出した少女の姿に、場の雰囲気が一気に盛り上がる。

フェラチオを受けていた陰茎などは、突然に射精を開始していた。

びゅるるるっ！

勢いよく宙を飛んだ精液が、顔面から肩、そして背中まで飛び散る。ねっとりした粘液

の感触と臭気に、アメリカは表情を緩ませて髪を振り乱し、適当な次のペニスへ舌先を伸ばしていた。

「んぷ……ふあああ！ き……ひゃ……ああんっ！」

突き込みに合わせて腰を振り、膣の締めつけを強める。唇をぱくぱくさせて肉棒を咥え、じゅるりと吸い上げる。

「っお、おい、ま、待てよ……っう」

ただでさえ興奮が増していたせいも、前後の男たちは連続して射精を開始した。膣内にぐちぐちと泡立った精液が弾け、口内に生臭い匂いが充満する。

「んふ……んくんくっ」

それでも満足しないのか、アメリカはくわえ込んだ亀頭を離さないままに精液を飲み下し、ずるずると吸い上げる。尿道に残っていた残滓が這い上がり、どろりと舌に広がった。「もっと……穢して。わたくしに命令してください……っ」

男たちは淫猥な言葉に誘われるように、露わにしたペニスでもって少女を囲む。放精が終えたばかりの膣口に次の肉棒が突き込まれ、口にも肉が差し込まれて。

「も、つと……んあああ！ はあ、ふああつ、いいです……っ！ 奥をつ、抉つてえ」
アメリカは一心不乱に腰を振り続けた。

「ああっ、イクう……！！ イキますうっ……奥で……イカせてえ……！！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>